

世界最古のトリセツ

日本キリスト教団高槻日吉台教会牧師

吉岡 恵生

終わりの日に

主の神殿の山は、山々の頭として堅く立ち

どの峰よりも高くそびえる。

国々はこぞって大河のようにそこに向かい

多くの民が来て言う。

「主の山に登り、ヤコブの神の家に行こう。

主はわたしたちに道を示される。

わたしたちはその道を歩もう」と。

主の教えはシオンから

御言葉はエルサレムから出る。

主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。

彼らは剣を打ち直して鋤とし

槍を打ち直して鎌とする。

国は国に向かって剣を上げず

もはや戦うことを学ばない。

ヤコブの家よ、主の光の中を歩もう。

(イザヤ書 2 章 2-5 節)

アメリカで見るトリセツの役割

皆さんは、新しい家電や家具などを購入した時に、取扱説明書を読む派でしょうか。それとも読まない派でしょうか。私は普段ほとんど読まないのですが、以前、アメリカに住んでいたことがありまして、その時には、半ば趣味のように、トリセツを読むことを楽しんだ時期がありました。

これはよく言われることですが、アメリカという国は、訴訟大国として知られています。製造物責任法、通称 PL 法という法律がありまして、ちょっとしたことでも、商品の製造側、提供側である企業が訴えられてしまう。そういう社会であるわけです。ですから、企業側は訴えられないように、過剰なまでに様々な注意喚起をトリセツの中に加えて行きます。それが、なかなかおもしろいのです。

たとえば、子供のおもちゃ売り場に行けば、スーパーマンのコスチュームが売っています。そのコスチュームのトリセツには、「このコスチュームによって空が飛べるようになるわけではありません」とわざわざ書かれています。オープンや冷蔵庫、洗濯機、乾燥機には、「人やペットを入れないでください」と書かれています。さらにピーナッツの袋には、アレルギー対策でしょうか「中にピーナッツが入っています」とわざわざ書かれています。当たり前じゃないかと、いちいち突っ込みたくなるものば

かりですが、しかし、これを書いておかないと、もし、何か事故が起きた時に、訴えられて多額の損害賠償を支払わなければいけなくなる。ですから、それを避けるために、過剰なほどの注意書きが、トリセツの中に書かれているのです。

まさか、そんなことしないようなあと思うことでも、する人はする。人は何をするか分からないという、そういうリスクを前提に、注意喚起を含むトリセツが作られている。これが、アメリカ社会における、トリセツのテンプレとなっているわけです。

聖書は人間のトリセツ

こうした実態に触れながら、私はある時ふとこんなことを考えました。これだけ様々な製品に対して、過剰なまでの注意書きが示されている一方で、それを使う、私たち一人一人、人間のトリセツと言いましょ。人生のトリセツと言いましょ。そういうものってあってもいいよなと思ったのです。私たちはそれぞれの人生の中で、人間関係に悩んだり、将来に対する不安を抱いたり、自分の価値が見出せなかったり、「これ、どう扱ったらいいんだよ!」と思う瞬間を様々に経験します。時には客観的に見れば、まさかそれはないだろうという行動を自他共にしてしまったりするような存在です。そんな私たちだからこそ、本当は一番トリセツが必要なのは、私たち自身なのではないかと気付かされるのです。

そして、周りを見回してみても、ふと気づきました。あるじゃないかと。今日私たちが手にしている聖書という書物。これはいわば、世界最古の人生のトリセツの一つと言ってもいいのではないかと。聖書とは何か。なかなか一言で表現することは難しいものでもありますけれども、あえて一言で表すならば、人間がどう生きるべきかを教えている、人生のトリセツでだと言えるのではないかと。思ったのです。

この時代に欠けていること

先ほど読んでいただいた聖書には、今から 2500 年ほど前に、預言者イザヤという人を通して語られた神の御言葉が記されていました。ここには、山々という言葉が繰り返し出てきます。山に登り、高いところから、物事を見ていくこと。そこから自分を俯瞰的に見ていくこと。その大切さが、ここから一つ示されるのではないかと思います。高いところに立つ。それは決して、偉くなるとか、富や名声を手に入れるとか、そういうことではありません。もっと単純なこととして考えてもいいでしょう。高いところに立つと、見えなかったものが見えるようになるんです。登山をしたことがある人なら分かると思いますが、山を降りてしまえば、そこには木が生い茂っていて、もはや景色も見えなくなります。自分が今どこに立っていて、どこに向かっていけばいいのかも分からなくなる。しかし、山の頂に登っていくと、先ほどまでうっそうとした森の中を彷徨っていた、その自分の姿や立っていた場所というのが見えてくるのです。

私は、今この時代に足りないのは、まさに、高いところから、自分を俯瞰的に見ていく視点だと思っています。世界の潮流を見れば、目先の利益のために右往左往している人が何と多いことかと思えます。環境の問題、資源の問題、平和の問題、人権の問題、世の中には色々な問題があるわけですが

けれども、そんなの関係ないと言わんばかりの国々のリーダーがどれほど多いことか。あちこちで戦争が起きます。何とかファーストとか言いながら、あたかも人間に優劣をつけ、優先順位をつけて搾取構造が作られて行く。実に視野の狭いことが行われ続けています。そういう自分の姿が、将来に何を生み出し、何を残すのか。もっと俯瞰的に、もっと大きなヴィジョンの中で自分のしていることを見ていかないと、この世界はどんどん悪い方に行ってしまうと思います。

使い方が問われている

4 節に、「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。」とあります。剣も槍も、鋤も鎌も鉄からできているものとするならば、これは人間が鉄をどう使うかという、まさに一つのトリセツだと言えるでしょう。鉄という同じ物を手にしていても、かたやそれが人を傷つける武器となり、かたやそれが人を生かすための農地を耕す道具となる。これは鉄という存在が問題なのではなくて、要はそれを使う人間側の使い方の問題になるわけです。鉄だけでなく、これは私たちが持っている様々な事柄においても言えることではないでしょうか。私たちの肉体、心、時間、あるいはお金、人間が発明する色々な道具。どれをとっても、結局は、それをどう使うかということが問題になるわけです。この手のひら一つとっても、人を叩けば傷をつける道具となり、人を起こせば人を助ける道具となる。私たちが持つ物の多くは、傷つけることも、助けることもできる、使い方が問われるものであることが多いのです。

聖書は、はっきりとした立場を示します。人は、傷つけ合うために生きるんじゃない。共に耕し、共に収穫を得るために生きるのだ。それが本来の人間のあるべき姿、目指すべき生き方だと聖書は私たちに教えています。読めば読むほど、聖書は大切な生き方を、今この時代にも、私たちに教えてくれていると感じます。ぜひ皆さんも、世界最古の人間のトリセツ、聖書をじっくりと読んでみてください。